



今日のお話しは、遺竜と烏竜という、親子のお話しです。

むかしむかし、中国が晋と言っていた時代、日本はそのころ弥生時代から古墳時代に移ろうとしていた頃のお話しで、唐の時代に書かれた「法華伝記」という、法華経に関した伝記に書かれています。

お父さんは烏竜といい、中国に仏教が伝わってくる前に信じられていた、道教を熱心に信仰していました。

その子供は遺竜といい、親の言うことを守る、とても立派な跡継ぎでした。

お父さんの烏竜が、亡くなるときに言った遺言を、絶対に守ろうとする子供の遺竜ですが、はてさて、その後どうなっていくのか？それは、この話を聞けばよく解りますよ。

大聖人様も、『法蓮抄』や『上野尼御前御返事』にこの話を引用され、御本尊様を受けたち、南無妙法蓮華経と唱えていくなかに、一切の功德が具わり、追善供養が叶っていくことを教えています。

追善供養の意義とその功德が説かれる、とっても大事なお話です。では始めます。



むかしむかし、中国の古い時代の頃、その国で字を書くのが一番上手な人がいました。その人の名前を、烏竜おりようといいました。

毎日のように、烏竜の家の前には、たくさんの人が、字を書いてもらいたくて並んでいます。

しかし、困ったことにこの烏竜はある一つのことにごだわっていました。

日本では、聖徳太子しやうとくとくたいしの頃にはじめて仏教が受け入れられ、これを信じる人もいました。しかし、信じない人も大勢おおぜいいました。

中国でも同じように、初めて仏教が伝わってきて、仏教を信じる人も出てきました。

しかし仏教に、老子らうしが説いた道教では成仏じやうぶつできないと打ち破られても、まだまだ根強ねづよく、道教を信じている人も大勢いました。

この烏竜おりようも、未だいまに道教にごだわり、仏教の話しを聞こうともしませんでした。だから、だれがたのんでも、法華経だけは絶対に書きませんでした。



その烏竜おりようが病びょう気きになつて亡なくならうとしていたとき、息子むすこの遺竜いりようを呼よんで言いいました。

「おまえは我が家に生まれて、私の書しよの道みちを習ならひ極きわめた。しかし、私が死しんだ後あとも、法華経ほっけだけはどんなことがあつても書かいてはならぬぞ。あの法華経ほっけは、我が家やで信しん仰こうしておる、老子様らうしさまの教くわえでは幸さいせになれないと言いつてい

るんだから……。」  
「お父さん、大丈だいじようぶ夫ぶだよ。ぼくは絶ぜ対たいに書かかないよ。安あん心しんして下ください」

「本ほん当とうにたのんだぞ。もしも私の遺言ゆいごんをたがえて、法華経ほっけを書かくようなことがあつたならば、すすぐに悪あく霊りようとなつてお前の命いのちをうばいに来きるからな……。」

「お父さん、そんな恐おそろしい言葉ことばが最さい後ごだなんて、悲かなしいよ」

そして、舌したが八はっつに裂さけて頭あたまが七ななつに割われ、目めや耳みみや鼻はななどから血ちを吐はいて、烏竜おりようは死しんでいいつたといいうことことです。



父親が亡くなつて、悲しみの中、お葬式が行われました。

父烏竜の舌が裂けたり、頭が割れたり、目や耳や鼻などから血が泉のように湧いてくる姿を見ても、息子の遺竜や身内の人々は、それが地獄・餓鬼・畜生という三悪道の苦しみによる姿であること、特に地獄の苦しみを受ける姿だとは知ることができませんでした。

遺竜は父親思いのとっても優しい子供でしたので、

「ぼくはお父さんとの約束を守る。絶対に法華経は書かないぞ！」

と固く心に誓いました。

当然、父親の影響で、仏教は自分の家の信仰の敵だと思い、心から道教を信じていました。



遺竜は父親の才能を引き継ぎ、その国では烏竜の次に字を書くのが上手でしたが、さらに書道の腕を磨きあげていきました。

こうして時が過ぎるうちに、その国の王様が仏事をするようになりました。

この王様は、我が国の中で一番字のうまいものに法華経を書かせて、自分のお経にしようと考えました。

ある日のこと、王様の使いの者が、遺竜の家に来て、

「おまえに王様がお経を書いてほしいと仰せである。さっそく王様の宮殿に来るようにとの事じゃ。おまえは幸せ者じゃなく」と伝えました。

そうです、その国一番の字がうまい者は、遺竜であると決定したのでした。

「どうしよう」

と一瞬、遺竜の顔が困ったような顔になりました。



遺竜は不安な気持ち一杯で王様のもとへや  
つてきました。

「これはこれは遺竜とやらよく来られた。私  
が信仰しておる法華経という教えは、最高の  
教えである。国のすべての人々の幸せと、私  
の親の供養のために、是非とも法華経を、我  
が国で一番字のうまい、そなたに書いていた  
だきたい」  
と王様は遺竜にお願いしました。

(心の中の独り言)

思っていたとおりで。困ったことになっ  
たぞ。王様の命令とはいえ、父との約束が  
ある。ハッキリと断ろう……。

と恐る恐る父親の遺言を話しました。そして、  
「王様のために何でもさせていただけきたいと  
思いますが、これだけはどうかお許し下さい」  
と何度も何度も断ったので、その遺竜の父を  
思う心に、王様は法華経を書かせることをあ  
きらめました。



しかたなく、王様は他の書道家に法華経を書かせてみましたが、どの字も王様は気に入りませんでした。

「やはり遺竜いりように書いてもらうしかあるまい」と、王様は再び遺竜ふたたびを呼びつけました。そして、

「おまえが親の遺言だからと、私の命令に逆らって、法華経を書かないことは、一応許さう。しかしお題目だいもくだけでも書いてほしい」と、やさしく三度命さんどめいじましたが、遺竜はなおもそれを断りました。

さすがの王様も怒おこった顔で、

「この国の天も地も王の支配しはいするところ、すなわち、お前の親はわしの家来けらいではないか。遺竜、おまえは父親の遺言に執とらわれて、大事な国の恩おんを忘れている愚おろか者ものじゃ。わしの命令じゃ。法華経の題目だけでも書け。書かぬと言うなら、今すぐにでもお前の首を切ってしまうぞ!!」

遺竜は書かないわけにはいかなくなってしまいました。泣く泣く、筆ふでを取って法華経の題目を書いてしまいました。



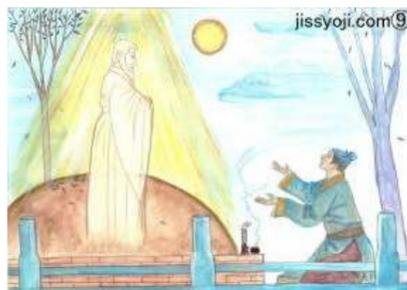
### 六十四文字の説明

この時に書いた文字とは、法華経は合計八巻はちかんからできていますが、その一巻いっかん一巻に、妙法蓮華経巻第一かんだいいちから妙法蓮華経巻第八と法華経の題目が書かれています。すなわち、一巻八文字の八巻ですから、八×八でハツパ六十四文字を遺竜は書いたことになります。

遺竜は、親不孝はしたくないけれど、直前にせまった責めを逃れるために、しかたなく法華経の題目の六十四文字を書いてしまったのでした。

「ああ。とんでもないことをしてしまった。父親の遺言をやぶってしまった。天の神も地の神もきつと怒り、遺竜は親不孝の者と思っ  
ているだろうなあ」  
と失意の中、王様の宮殿を出て、ただふらふらと、あてもなく歩いていると、いつの間にか父親のお墓の前にいました。

そして、涙を流しながら、  
「お父さんごめんなさい。約束を破ってしまいました」と詫びました。



遺竜は泣いて、泣いて、三日の間墓を離れず、食事も眠ることもしないでいると、三日目の朝方、死んだようになって倒れてしまいました。そして、意識がもうろうとするなか、夢を見ました。

夢の中に、目がくらむような、まぶしい光が差し込んできました。

朝日が照らしているのかと思っていると、天人が一人立っており、さらに、無数の眷属が連なっていました。その天人の上空には六十四人の仏様がおられました。

遺竜は、あまりに立派なお姿にビックリして、

「あなたはいかなる人ですか？」

と聞くと、

「私はおまえの父の烏竜である」

と答えました。お父さんだったのです。

そして、お父さんは息子に、

「遺竜よ本当にありがとう」

と、心からお礼を言うのでした。



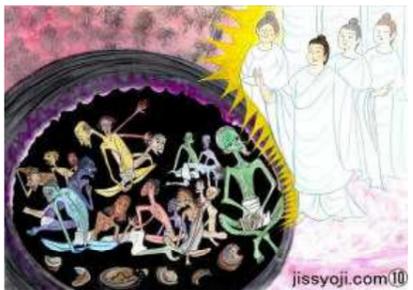
そのお礼の理由を烏竜は話し始めました。

「私はお前に、法華経は何があっても絶対に書いてはならぬと言ったために、無間地獄に墮ちてしまった。死ぬ時の苦しみでさえ耐えられないと思ったのに、無間地獄の苦しみは、さらにその百千万億倍というひどい苦しみだった。お前が私の言ったことを守って、

『法華経は絶対に書きません』

と言う度に、その言葉は炎となって私を責め、さらに、その言葉が、剣となって天から雨のように降ってきた。

しかし、それはだれのせいでもない、ましてや親の言ったことを守っている遺竜のせいでもない。自分が言った自分の言葉を悔やんだけれど、どうしようもなかった。



ところが昨日の朝から、金色の仏様がその無間地獄にあらわれて、燃えさかる火に水をいっぱいかけたように、苦しみが治まったので、私は合掌して

『あなた様はなんという仏様ですか？』

とお聞きすると、仏様は

『私はお前の息子遺竜が書いたところの六十四文字の内の妙の一字である』

と仰せられ、六十四人の仏様が六十四の満月となつたので、無間地獄の闇は即寂光の都となり、私及び一緒にいた罪人は、皆がその仏様に救われ、天上界に昇ることができるようになった。そのことをお前に伝えに来たのじや。本当にありがとう」と、喜びにあふれた顔をして心からお礼を言うのでした。



遺竜は夢で見た内容を王様に伝え、更に、  
次ぎのような親子の会話を話しました。

「ぼくの手で書いたものが、どうしてお父さんを助けることになったのでしょうか？それに、ぼくはむりやり書かされたわけで、自分から書こう思ったのではありません。いったいどうしてですか？」

と、お父さんに聞いてみると、

「お前の手は我が手である。お前の身は我が身である。お前が書いた字は我が書いた字である。お前が心に信じていなくても、手で書いたゆえにこうして助かったのである」と、答えてくれたそうです。

この内容を王様に伝えたくて、そして、むりやりにでも、自分に法華経を書かせてくれたお礼が言いたくて、嬉しくて急いで王様の所をやってきたのでした。

それを聞いた王様も、

「我が願いは成就した。このことを書き留めよ」と仰せられ、嬉しそうにしました。



お父さんの遺言を破ってしまった遺竜でしたが、法華経の題目を書いただけで、それも何も知らなくてイヤだと思いつながらでも、その功德でお父さんを救うことができました。そしてお父さんが最後に、

「法華経の仏様は、悪口を言った者でさえも助けてくれる、本当にありがたい教えじゃ。

遺竜よ本当にありがとう」

との言葉に、遺竜はそれからというもの、法華経の教えを信じるようになりました。

日蓮大聖人様は、このお話を通して、

「これは書写の功德である。書写の功德は一番低い功德である。ならば、読誦する功德は量り知れないものがある」と教えています。

私たちが唱える南無妙法蓮華経は、法華経の肝心要の教えです。三大秘法の御本尊様に向かって、南無妙法蓮華経と唱えるとき、その功德は無量無辺で、自分も他の人もすべてを幸せに導くことができます。

だから皆さんも一生懸命にお題目を唱えていきましようね。以上で終わります。